

司の後頭部には一之瀬の大きな胸が当たっていた。

しかし司には女性の柔らかさを感じている余裕などなかった。

司と一之瀬は女子更衣室のロッカーに身を隠していた。

目的は女子水泳部員である青山凜乃の着替えを覗くためだった。

話を持ちかけたのは一之瀬だった。

司は欲望のままに一之瀬の話に乗ってしまった。

現在二人は女子水泳部の更衣室に侵入し、青山凜乃の隣のロッカーに身を潜めている。

「私たち密着好きだよね？」

一之瀬の声は心なしか弾んでいた。

断ることもできたはずだった。

女子更衣室に侵入するなど犯罪以外のなにものでもない。

だが司は誘惑に負けてしまった。ロッカーに潜んでいれば、下着が見られるどころでなく、青山凜乃の裸が見られるのだ。

「私断ると思ってたけど、やっぱり司くんは純粹なんだね」

「……純粹？」

「普通の高校生だったら断るもん。でも司くんは心も小学生ってこと。つまりそれは純粹無垢の証なんだと思う」

褒められているのか、からかわれているのか司には判断できなかった。

「司くん、今勃起してる？」

唐突に一之瀬が聞いてきた。

「隠さなくていいからお姉さんに言ってごらん」

「してないです……」

「もしかして緊張してる？」

司はこくりと頷く。

「そっか。ならお姉さんが緊張をほぐしてあげるね」

そう言うと、一之瀬は司の下半身に両腕を伸ばし、司の内腿をそっと擦り始めた。

司は身体全体をビクリと震わす。

「どう？ おちんちん勃ってきたかな？」

一之瀬の思惑通り司の息子はみるみる勃起していく。

「緊張なんかしてたら損だよ。これから凜乃ちゃんの裸を見るんだよ。万全の態勢で臨まないとね」

一之瀬の声が一段と弾んでいく。楽しくて仕方がない様子だった。

「——あっ、誰かきた」

司は息を殺しつつも、扉の隙間から室内の状況を確認する。

最初に目を惹いたのは、すらりとした綺麗な脚だった。

途端に司の息子がさらに膨れ上がる。

青山凜乃だった。

いつも眺めていた脚が目の前にある。いつも踏まれたいと願っていた脚が手の届きそうな距離にある。司の身体が青山凜乃だと訴えかけていた。

「凜乃ちゃんだよ。凜乃ちゃんがきちゃったよ」

一之瀬は囁きかけるように司の耳元で呟き、両手は司の内腿を触り続ける。

「ねえ、おちんちん触ってほしい？」

視線で青山凜乃を追いながらも、司の意識は下腹部に向けられていた。

「好きな女の子の着替えを覗きながらおちんちん扱いたら気持ちいいよね」

青山凜乃がスカートに手を掛ける。

「あっ、脱いじゃうね、凜乃ちゃんスカート脱いじゃうね」

司は青山凜乃に熱い眼差しを向ける。

「脱いじゃったね。ほら今絶好のおちんちん扱きタイムだよ。どうしたの？ シコシコしないの？」

司は右手を動かしかけたものの、すぐに元に戻した。

「どうしたのかな？ 今おちんちんシコシコしたら相当気持ちいいよ」

「でも……」

「躊躇う必要なんてないんだよ。だって君はまだ小学生なんだよ。綺麗なお姉さんの下着見てもおちんちんシコシコしてもなにも問題ないの」

青山凜乃はブラウスのボタンを外していく。

「恥ずかしがることなんてないんだよ。ほらシコシコしちゃいなさい」

司の息が荒くなる。

「自分でできないならお姉さんが手伝ってあげよっか？」

「お、お願いします……」

「ふふ、素直な子はお姉さん好きだよ」

一之瀬は内腿にある両手をゆっくりと司の息子に近づける。

「ほら見て。ブラウスも脱いじゃった。おっばい大きいね」

「ああ」

「あんな柔らかかそうなおっばいに挟まれたらたまらないだろうね」

一之瀬は焦らすように司の睾丸をズボン越しで触り始めた。

「ブラ取ったらおっばい見えちゃうね、生おっばい。司くん見たことないよね」

「ないです……」

一之瀬は弄ぶように睾丸を指先で転がす。

「柔らかかそうなおっばい見たら、ますますおちんちん硬くなっちゃうね。でもいいんだよ。

欲望のまま勃起しちゃっていいんだよ」

「触ってほしい……」

「ん？ どうしたの？ おちんちん限界かな？」

「触ってほしい……」

「お姉さんにシコシコしてほしいの？ 両手で君のおちんちん包み込んで激しく扱ってほしんだ？」

司は何度も首を縦に振った。

「ズボン越しでいいのかな？」

再び司は首を縦に振った。

「ふふ、もう何も考えられなくなっちゃったみたいだね。頭の中射精のことでいっぱいみたい」

青山凜乃がブラのホックに手を掛ける。

「もうすぐおっぱい見えるね。ほら、ちゃんと見るんだよ」

司の鼓動が早くなる。

背中には一之瀬の大きな胸、目の前には青山凜乃の豊かな胸が露わになろうとしている。

「凜乃ちゃんのおっぱいが見えた瞬間、お姉さん、司くんのおちんちん全力で扱ってあげるね」

「ああ」

「絶対気持ちいいよね。凜乃ちゃんのおっぱいを覗きながらお姉さんに手コキされるの。想像しただけで興奮しちゃうね」

青山凜乃がブラ紐に手を掛ける。

司の喉が盛大に鳴り、鼻息が荒くなる。

「あっ、おっぱい見えちゃったね」

その瞬間、司の視界が暗闇に覆われた。

一之瀬は両手で司の目を抑えていた。

「小学生には刺激が強すぎるから見ちゃダメ」

「な……」

「ダメだよ。見ちゃダメからね」

「お、お願いします……」

「おねだりしてもダメ。お姉さんが許さないよ」

司は自分の息子を握りしめ、扱こうとした。

「いいの？ 今シコシコしちゃっていいのかな？」

「したい……」

「この後、凜乃ちゃんの脱ぎたての下着でオナニーしたくないの？ ロッカー開けたら凜乃ちゃんの生下着があるんだよ。それなのに今射精しちゃうの？」

「ああ」

「それにお姉さんが手伝ってあげてもいいんだよ。凜乃ちゃんの下着でお姉さんが手コキしてあげるの。なのに今扱いちゃうの？」

司の息子は今にも暴発しそうなほどそそり立っていた。

目の前に青山凜乃がいる。それも裸の青山凜乃がいる。視界を遮られているからこそ、司の感覚は研ぎ澄まされていた。

扉の向こうに裸の女性がいる。今この瞬間、オナニーをしないという選択肢はない。しかし今我慢すれば凜乃の下着でオナニーができる。脱ぎたての下着を使って射精できる。それも一之瀬の手でしてもらえるかもしれない。

「どうするの？ 自分でする？ それともお姉さんにしてもらおう？」

司は選択を迫られた。

「裸のお姉さんが目の前で着替えてるよ？ おちんちんシコシコなくていいの？」

一之瀬は司の反応を楽しむかのようにオナニーへと誘導していく。

「今出しちゃえば？ もう限界なんですよ？」

「ああ」

「射精したくないの？」

「ああ」

「別に出しちゃってもまたすぐに勃起するでしょ？ そしたらお姉さんが凜乃ちゃんの下着を使って手コキしてあげる。だから遠慮せず出しちゃいなさい」

「……一之瀬さんがいい」

「お姉さんがいいの？ 今我慢して、あとでお姉さんにシコシコしてもらおう方がいいの？」

司はこくりと頷く。

「それでいいの？ 本当にそれでいいかな？ 凜乃ちゃん今裸なんだよ？ 射精したくないの？ 今扱いたら最高に気持ちいいよ。それでも我慢するの？ こんなチャンス二度とないよ。裸のお姉さんが目の前にいるんだよ？ もう一生こんな状況でおちんちん扱く機会なんてないんだよ？ それでもいいの？」

司の右手がピクリと動く。

「我慢汁もいっぱい出して、おちんちんも硬くして、あとはシコシコするだけだよ。精子ピュッピュッってお漏らししたくないの？」

「一之瀬さんに……お姉さんにしてほしい……」

司の言葉に、一之瀬は嬉しそうに微笑み、そっと耳元で囁いた。

「——そんなにしてほしいなら今してあげる」

一之瀬の甘い囁きに、司の息子はかつてないほど隆起していく。

「ああ」

感嘆の声が漏れ、我慢汁が止めどなく流れ出す。

女性の手でしてもらえる。

一之瀬の手でしてもらえる。

後頭部におっぱいを感じながら、司は身もだえる。

扉の向こうに裸の女性がいることを想像するだけで、司の興奮が高まっていく。

「おちんちん扱いちゃうよ？」

一之瀬は左手で司の目を抑えつつ、右手を内腿にあてがう。
一之瀬の手が近づくとつれ、司の期待と興奮が高まっていく。
女性の手、女性の胸、お姉さんの手、お姉さんのおっぱい。
ただそれを考えるだけで司の興奮が最高潮に達した。

溜り溜まったマグマが一気に押し寄せてくる。

「あああああ——うぐうぐ」

司の射精と同時に一之瀬は司の口を塞ぐ。

くぐもった呻き声を漏らす司。

目と口を抑えられたまま、司は射精を繰り返す。

何度も身体を震わしながら精子を吐き出していく。

視覚を奪われ、呼吸すらできない司だったが、射精だけは止まらなかった。

「気持ちいい？」

パンツを通り越し、ズボンが精子で汚れていく。

「大丈夫？」

一之瀬が耳元で囁く。

「全部出た？」

司は壊れたロボットのように頷く。

「お漏らし射精気持ち良かった？」

一之瀬が優しく問い掛ける。

「色々想像して興奮しちゃったのかな？」

「うぐうぐ」

「ごめん。もう抑えなくていいよね」

一之瀬は司の目と口から手を離す。

司はロッカーの間隙を覗くも、誰もいなかった。

「もう凜乃ちゃんいないよ。司くんが絶頂してる時、部屋出てちゃったの」

一之瀬が大きく息を吐く。

「はぁ疲れたー。司くんの声抑えるの大変だったんだよ。射精するたび、声出すんだもん。

それにバカみたいに精子出しちゃって」

「……」

「私にしてもらわなくてもなく、自分でするわけでもなく、自動射精とは驚いたよ」

「よく覚えてないです……」

ようやく司は落ち着きを取り戻す。

「でしょうね。私、司くんが壊れたと思ったもん」

「ははは……」

「それにしてもパンツの中に出すの好きだね」

司は自分の下半身に視線を移す。下半身だけ雨に降られたように濡れていた。

「さてと、次は凜乃ちゃんの下着で出しちゃおっか？」
そう言って一之瀬は司と共にロッカーの外に出た。